

## 『双翼の日の丸エンジニア～ゼロ戦と飛燕の遺伝子は消えず』

### 【概要】

超々ジュラルミンで覆われた重厚な濃緑色で塗装された零式艦上戦闘機、通称「ゼロ戦」五二型の25分の1の模型は、力作揃いの展示作品が所狭しと並べられた模型ショー会場の広大なフロアのなかでも、ただ一機、明らかに他の模型とは一線を画す異彩を放っていた…。

このゼロ戦模型の製作者は葛城衛(かつらぎ・まもる)。元ミノルタ(現コニカミノルタ)で新型カメラの研究・開発部門に在籍したカメラエンジニアで、世界初の本格オートフォーカス一眼レフカメラ「ミノルタα-7000」の開発プロジェクトの主要メンバーだ。

葛城は防衛大学で航空機設計を学び、防衛大4年のときに受けたゼミの名前は「堀越ゼミ」。宮崎駿監督のアニメ「風立ちぬ」のモデルとしても知られる、あの伝説の零戦主任設計者、堀越二郎から直接、航空機設計について指導を受けた教え子である。

「『ゼロのDNA』は『α-7000』へと受け継がれていた…」

この物語の主人公は、もう一人いる。

川崎重工でジェットエンジン事業部長などを歴任した元エンジニア、百合草三佐雄(ゆりくさ・みさお)。バイクエンジニアとして数々の新型バイクの実験開発チームのリーダーなどを務め、世界最速の称号を誇った大型バイク「カワサキZ1」の開発のときは米大陸に乗り込み、現地で走行試験を敢行。世界のバイク界を驚愕させた、あの伝説のモンスターマシン「Z1」の開発プロジェクトの主要メンバーだ。

百合草は名古屋大学工学部航空学科でジェットエンジンを研究する「航空原動機」を専攻。大学時代の恩師の名前は、堀越と東大工学部で学んだ同級生のライバル、土井武夫。

第二次世界大戦下、当時、世界最高速度を記録した旧日本陸軍の戦闘機「飛燕」を設計した土井武夫に学んだ最後の弟子だ。

「世界最速の戦闘機『飛燕の遺伝子』は、世界最速のスーパーバイク『Z1』へと受け継がれていた…」

敗戦後、航空禁止令で途絶えたかに見えた土井、堀越の航空技術者のDNAはしたたかに生き残っていた。二人が継承したDNAは、航空機からオートバイ、カメラへと姿を変えながらも、ゼロ戦や飛燕が登場したときと同じように、いずれもセンセーショナルな世界デビューを果たしていたのだ。

葛城らが手掛けたカメラは、米ソの宇宙飛行士が自ら選びロケットに持ち込み、宇宙を飛んでもいる。世界へ配信された宇宙の映像は、米ソ製のカメラではなく、日本のカメラがとらえた写真だった。

百合草が手掛けたバイクZ1は、ロス五輪の聖火ランナーを先導する白バイに抜擢。世界

中に放映された。米開催の五輪で活躍したバイクが、米国の象徴、ハーレーダビッドソンではなく日本製バイクだった事実をどれだけの人が知っていたのだろうか。また、Z1の後、百合草が開発したGPZ900Rは、ハリウッド大作「トップガン」で、主演のトム・クルーズの愛車として登場。今年公開される「トップガン2」でも同じバイクが登場する。

戦争で日本は負けたが、戦後、日本の技術者はしたたかに世界と戦い続けていたのだ。ここで描かれるのは、「ゼロのDNA」と「飛燕の遺伝子」が、途切れることなく、脈々と、かつ、確実に受け継がれ、不死鳥のように蘇った「二つの奇跡の物語」である。

### 【著者プロフィール】

戸津井康之（とついでやすゆき） 1965年、大阪府堺市生まれ。元産経新聞文化部編集委員。大学卒業後、日本IBMを経て、1991年、産経新聞入社。大阪本社社会部記者、大阪、東京本社文化部記者、大阪文化部デスク、文化部編集委員を経て2018年に退職し、現在、フリーランスのライター。産経新聞記者時代は紙面とネット連動の連載コラム「戸津井康之の銀幕裏の声」「戸津井康之のメディア今昔」などヒットコンテンツを手掛ける。共著に「大阪の20世紀」（東方出版）、「命の重さ取材して」（産経新聞社）、「人口減少時代の読み方」（産経新聞社）など。